

受賞者の業績



佐藤 千代子氏 47歳(北海道・助産婦)

町内の約半数が無介助分娩であった大樹町に母子健康センターが設立され、無介助分娩解消のため完全看護を実施するなど、初代助産婦として活躍。

その後、町役場の保健指導係で新生児から幼児まで一貫した管理体系の基礎を確立し、現在、町立病院の看護部長として、住民に喜ばれる看護体制の確立を目指し、後輩の指導に努めている。



三浦 みや子氏 49歳(青森県・助産婦)

黒石病院、川崎市中央保健所、八戸市立病院で助産婦として活躍。現在は、八戸市高等看護学院で教務長として、母性看護などを担当している。

母子看護の後継者や指導者の育成に努めながら、時間外にはボランティアとして電話相談、家庭訪問により、母子の生活の安定を図ったり、身障児のために援助を惜しまず、幅広く活躍中である。



斎藤 カツ子氏 44歳(山形県・保健婦)

東京都内の保健所で勤務後、郷里山形県の病院、保健所に勤務し、常に前向きの姿勢で問題意識をもって業務に取り組み、特に学問的調査研究には独創的なまとめを行い、母子保健推進員活動に示唆を与えた。

母子相互作用班の分担研究で、祖母育児の多いことがわかり、祖母育児学級を開催するなど、地域性を踏まえた育児のあり方に精力的に取り組んでいる。

武 山 文 子 氏 50歳(宮城県・保健婦)

昭和39年に新産業都市に指定された多賀城市は、急速な若年人口の増加で核家族が増え、若い母親が孤立する傾向にあることを踏まえ、広報紙による母親教育、特にハイリスク妊婦の家庭訪問、母親学級などに積極的に取り組んでいる。

また身障児の混合保育所が開設されると、在宅障害児にも集団遊びを体験させようと教室を開催するなど、精力的に事業を推進している。



福 田 けい子氏 45歳(茨城県・助産婦)

分娩後、産褥期間中、介護する人がいなくて困っている人を受け付ける産褥ホームを経営するかたわら、幼児向けの紙芝居による性教育や、小学校・高校・家庭生活学級などの母親のグループなどの依頼により、性教育の講演や個人相談を実施している。

また看護学校、短大の講師として幅広く活躍するなど、地域助産婦として今後が大いに期待されている。



田 邊 し げ氏 54歳(千葉県・保健婦)

袖ヶ浦町で35年間、「人間の健康づくりは母子保健から」という信念を基本に、その時代のニーズを的確につかみ、行政ルートにのせ、必要とする事業を他の市町村に先がけて開始。

特に愛育班、母子保健推進員を育成、四カ月児神経発達クリニックを開設するなど、各種健診等の受診率を高め定着させて、住民や町の職員から高く評価されている。



市 川 泰 子氏 55歳(練馬区・助産婦)

昭和33年から助産院を開業。多くの出産に立ち会っているなかで、約半程度は妊婦の経済的困窮により無料奉仕となっている。

また小口資金の保証人になったり、さまざまな相談の相手になるなど、妊婦への援助を積極的に行っており、助産所での分娩が減少するなかで、市川助産院を利用する妊婦はますます増え、地域母子保健の拠点ともなっている。





錦 織 京 子 氏 49歳(長野県・保健婦)

県内の保健所で家族計画、乳幼児健診、母性保護のための巡回相談などを実施。その間保健婦養成所で保健婦の養成にあたり、母子実習指導に力を注ぎ学生の信望も厚く、その指導性を高く評価されている。

その後、須坂市に勤務となり、保健補導員制度の地区組織の育成指導にあたり、その活動は、市町村の範として、全国に報道されている。



水 野 加 壽 子 氏 48歳(愛知県・保健婦)

知多・美浜保健所では乳幼児健康管理のシステムを検討、特に知多では管内三市の保健婦の地域担当と業務担当を組み合わせた業務連携を確立し、健診システムが合理的、かつ確実性をもって運用されるよう計画実施し、受診率の向上に貢献。

また、女子中学生親子を対象に貧血教室を開催し、貧血生徒の減少を図っている。



井 鍋 巨 子 氏 50歳(名古屋市・保健婦)

市内の保健所において永年にわたり、乳幼児の健全育成を目指し、乳幼児の各種の健康診査票の統一化に努力し、母子管理基礎表を作成。保健所における全数管理体制の整備を図った功績は大きい。

また大都市のなかで母親どうしの連帯意識が乏しく孤立する母親たちに、共通のテーマを提供して会合を進めるなど、自主的グループの育成に努めている。



植 木 町 子 氏 47歳(兵庫県・保健婦)

西脇保健所を振り出しに、県内の保健所で3カ月児に先天性股関節脱臼の有無を重点的に検診を実施し、異常児の早期発見、早期治療の体制づくりに尽力した功績は大きい。

また、幼児の心の検診を実施し、母親の養育態度が子どもの発育に及ぼす影響が大きいことを究明。これらのことを踏まえ、関係機関を指導。後輩の育成にも尽力している。

男 武 一 予氏 47歳(山口県・保健婦)

昭和36年当時、防府市内の離島では育児知識の不足から栄養失調、発育の遅れが多く、学童の体位は市内でも最下位であったため、その劣悪な状態の改善に取り組み、島の有力者を説得して育児相談所を開設、異常の早期発見をはじめ、的確な指導により成果をあげた。

また愛育班だより、市広報、有線などを利用し、住民の知識の向上、普及啓蒙運動に努めている。



園 田 さより氏 36歳(福岡県・保健婦)

新吉富町は保健所からも遠いため、町医、保健所の協力を得て、乳幼児健診の企画、立案、事後の統計整理まで、常に住民のニーズにこたえた業務を実施し、受診率を高めている。

また寄生虫撲滅事業、ぎょう虫駆除で効果をあげたり、村民健康づくりの一環として中学生の貧血検査を実施し、五年後には五分の一に減少するなど、著しく成果をあげている。



高 橋 洋 子 44歳(熊本県・保健婦)

昭和49年天草郡五和町で、保健婦専用の軽自動車購入が認められると同時に、新生児・未熟児の全戸訪問を実施し、「子どもが生まれたら保健婦が訪問する」ことを実践。天草健康展、歯の健康教室などを積極的に開催。

また障害児の母と子の会「あけぼの学校」に参加するほか、筋拘縮症児の全員の管理カードを作成し、療育指導・育成医療を適切に行っている。



中 澤 祥 子氏 45歳(沖縄県・保健婦)

離島・へき地における医療要員の確保が困難なかで、那覇から400キロ離れた南大東村に駐在し、住民の健康保持増進のため、昼夜を問わず活躍を続けている。

10年前から小児科専門医のいない当地で、各関係機関の協力を得て、専門医による乳幼児一斉健診を実施するにあたり、計画、調整を精力的に行った。現在も継続され着々と成果をあげている。

